

有限会社エコ・ライス新潟

新潟県長岡市脇川新田町字前島970-100
TEL:0258-66-0070 & FAX:0258-66-0447

クイーン倶楽部だより 10月号

《今回の「白藤プロジェクト」はただの農業体験ではありません。管理栄養士の卵たちに白藤を現代風にアレンジしてもらったため、栽培から白藤というお米を知ってもらいました。》

《80年の時を経て、白藤が復活しました。上原酒造の2代目の杜氏が「白藤を使った酒はうまかった」と懐かしんだ酒米です。今回刈り取りされた白藤が日本酒となる日が待ち遠しい！》



産学地域連携Project

東京家政大学の学生と

第3弾

白藤ついに収穫!

幻の酒米「白藤」復活に挑戦!

クイーン倶楽部だよりで5月号からお伝えしている「白藤」がついに収穫の日を迎えました。

東京家政大学の早乙女たちが自分で田植し、草取りをして育てた米を鎌で丁寧に刈り取りしました。

これから学生の手で商品開発をし、白藤を平成の世によみがえらせます。



写真①：学生10名、中村教授、越尾先生、上原酒造社長・杜氏が一列になり、一斉に稲刈り！
 写真②：田んぼに新潟の地元テレビ局3社、新聞社が取材に。学生は稲刈りをしつつ、取材にも答えていました。
 写真③：今年5月に田植した約5aを総て手で刈り取り。残暑暑しかったこの日、農家帽が役立ちます。
 写真④：刈り取った稲をまとめてコンバインで脱穀。半袖で作業をしていた学生は、細くなった稲が肌に刺さり、赤くなってしまいました。
 写真⑤：作業終了！脱穀を終えて山になって稲わらに全員でジャンプ！

Dr中村の お米の話



中村 信也(なかむらのぶや)

医学博士。東京家政大学家政学部栄養学科教授として教鞭をとり、「食と医療」の医療薬膳研究の第一人者として活躍中。

第10回 藁人形

この言葉には懐かしい響きがあります。もはや絶滅してしまった語でしょうか。大型コンバインの脱穀をみながら寂寥の思いにとらわれていました。

このたび長岡を舞台に「白藤」の稲刈りを演じさせてもらいました。演じるは、華の女子大生10人衆です。もんぺ姿のハンドメイド稲刈りですからマスコミが注目しないはずがありません。三社のテレビ局、一社の新聞社で、現場は大賑わいでした。

稲刈りは昔散々やっていたので、それほど郷愁はありませんでした。ただ、びっくりしたことがあります。それは、「藁が出ない!」です。コンバイン下での稲刈りは知りません。藁が出ないというのは予想してなかったことでショックでした。

昔、藁は貴重だったので。足踏み脱穀機で脱穀をやっていると、藁を求める人がその場で買い上げてくれます。桜島の藁買いがみかんと交換しないかと持ちかけてきます。それぐらい藁は貴重でした。でも、今藁はごみなのです。その場で藁が切り刻まれていきます。

昔、藁は縄・畳・屋根ふきなど多利用されました。究極の利用法として藁人形がありました。私は柱に打ちすえてあった藁人形を見たことがあります。やはり、凄く迫力があります。これは宗教儀式の一種です。藁人形、五寸釘、ろうそくの三点セットでことがなされます。藁人形は自分で作らねばなりません。(販売はされていません)闇夜に鉢巻にろうそく二本立てで、神社で捨てられて男を口ずさみながら気魄に満ちた顔で藁人形に釘を打ちます。すると、霊験あらたかに相手は心筋梗塞で死亡するというものです。藁がなくなると儀式も消えたのでしょうか。

